

教養問題 (現代文)

(四枚のうち1)

問題一

問一 次のa～eの意味を表す語として最も適当なものを、後の①～⑩の中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えよ。解答番号はa | 1、b | 2、c | 3、d | 4、e | 5。

- a 運動を制止すること。速力を落とすこと。ブレーキをかけること。
- b 立ち居ふるまい。人の動作や行為。
- c 機械を動かすこと。
- d 新しい物事が旧来のものをつき破って生じようとする動きが感じられること。
- e 状況に応じたすばやい活動。

- ① 機動
- ② 情動
- ③ 制動
- ④ 騒動
- ⑤ 駆動
- ⑥ 流動
- ⑦ 挙動
- ⑧ 稼動
- ⑨ 胎動
- ⑩ 鼓動

問二 次のa～eの傍線部の「ロウ」の漢字として最も適当なものを、後の①～⑩の中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えよ。解答番号はa | 6、b | 7、c | 8、d | 9、e | 10。

- a 時代に翻ロウされる人々の姿が描かれている。
- b 実施に遺ロウがないように確認を重ねた。
- c このロウ巧な弁護士をもつても解決困難な事案であった。
- d この男のロウ費癖は生涯変わることがなかった。
- e 作者本人によるロウ読会が開催される。

- ① 老
- ② 労
- ③ 弄
- ④ 郎
- ⑤ 朗
- ⑥ 浪
- ⑦ 廊
- ⑧ 楼
- ⑨ 漏
- ⑩ 籠

問三 次のa～eの空欄には慣用句を構成する語が入る。それぞれ最も適当なものを、後の①～⑩の中から一つずつ選び、その記号を答えよ。解答番号はa | 11、b | 12、c | 13、d | 14、e | 15。

- a 都会に出てきている者には、誰にも () が付く食べ物があるものだ。
- b 受賞の報を聞いて会いに行くと、彼女の周りには既に () の人ばかりが出来ていた。
- c 厚顔無恥な部長は、部下に責任を転嫁しても () が悪くならないのだろう。
- d それなりに苦勞の多い社会人生活も十年を超え、自分もすっかり () が抜けたと思っていた。
- e 彼が () 付きの正直者であることは、皆が知っている。

- ① 灰汁あかく
- ② さび
- ③ 里心
- ④ 食い気
- ⑤ 折り紙
- ⑥ 下駄げた
- ⑦ 黒山
- ⑧ 水心
- ⑨ 寝覚め
- ⑩ 腑ふ

問四 次のa～eの空欄に入る最も適当な動詞を、後の①～⑩の中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えよ。解答番号は

a 16、b 17、c 18、d 19、e 20。

- a 祖父は骨董に（ ）て、先祖伝来の資産をなくしてしまった。
b 人からちやほやされ（ ）られたからと言って、誰もが喜ぶと思うのは愚かだ。
c 高校を卒業する頃になると、彼は家族によって跡取りに（ ）られていた。
d 市議全員に（ ）られても、市長はかたくなに非を認めようとしなかった。
e 煮え切らなかった村長も村民に（ ）られて、断固反対ののろしを上げた。

- | | | | | |
|---------|---------|--------|---------|--------|
| ① いれあげ | ② かきあげ | ③ くみあげ | ④ たたきあげ | ⑤ つきあげ |
| ⑥ つとめあげ | ⑦ つるしあげ | ⑧ ふりあげ | ⑨ まつりあげ | ⑩ もちあげ |

問題二 次の文章を読み後ろの設問に答えよ。

生物としてのヒトが食べる行為は、生存に欠かせない栄養素の摂取を目的としている。そしてそのために動物質、植物質双方の食材を得てきたことは、前項にも書いたとおりである。同じ哺乳動物のなかでも、草食（食植性）動物と肉食（食肉性）動物とでは食べるものがまったく異なる。ただし糖質やタンパク質を必要とする点では、どの動物もまったく変わらない。肉食動物は、草食動物をハントするとその血液や消化管の内容物を好んで食べるという。いっぽうで、草食動物は、植物からあらゆるものを摂取しなければならない。植物細胞もいくらかのタンパク質を含むから、そこからタンパク質を摂取している。ただし、よほどの量を食べないと必要な量のタンパク質は摂取できない。彼らが一日中口を動かしている理由の一つはここにある。

ヒトはどうか。ヒトを含めて近縁の動物では、動物の骨をかみ砕いたり肉を食いちぎったりする力は肉食動物に比べてずっと弱い。生肉や腐肉を消化するほどの強力な消化液も持っていない。植物性の食材を食べる場合も、草食動物のように発達した腸や酵素を持たず、セルロースを消化したり、そこに含まれる少量のタンパク質を利用したりすることができない。せいぜい、種子や果実などの柔らかい組織から糖分を摂取できる程度なのだ。だからヒトは、比較的柔らかく消化のよいものを、動物質、植物質を問わず摂取しなければならなかった。

ヒトの消化力の弱さを助けたのが、火を使ったり発酵させたりする調理の発明であった。調理は食物を柔らかくし消化をよくしたり、またアク抜きすることによって、食材の範囲を大きく広げた。それはまた、殺菌、消毒の役割も果たした。これによって、とくに乳幼児の健康状態は大きく改善し、また死亡率の低下にもつながったことだろう。だから調理は、まさに「必要の母」であった。

定住化を進めた人間の社会は、集落の付近で動物質、植物質双方の食材を手に入れることを余儀なくされた。現代に住むわたしたちはこれらを別のもの、つまり違う場所から供給される別のものと考えているが、歴史的にみれば両者は同じ場所、ないしはきわめて近接した場所で作られ、あるいは採られ、調理されて食されてきたのである。二つの栄養素のこの関係を、ここでは「糖質とタンパク質の同所性」と呼ぶことにしよう。そしてこの関係は、その土地の風土に応じてさまざまなかたちをとってきた。それは、モンソン地帯では、「米と魚」または「雑穀と魚」というかたちをとった。欧州や西アジアでは、「ジャガイモとミルク」または「麦とミルク」というかたちが出来上がった。欧州の大西洋側の地域では、「ジャガイモと魚」というかたちも出来上がった。インド社会は、肉食（b）の長い歴史を反映して、「雑穀と豆」「米と豆」あるいは「雑穀とミルク」というかたちをも作りあげた。

同じ地域でも、出来上がったかたちは時代により異なる。欧州における「ジャガイモとミルク」や「ジャガイモと魚」のcジヤガイモは、明らかに一六世紀以降のものである。日本列島でも、東北地方の北部が「米と魚」のかたちを持つようになったのは近世以降であり、それ以前は、「雑穀と魚」の地域であった。

dところで、e食べるということがもたらしたものがもうひとつある。それが社会性の発達である。つまり、人間は食べるという行為を通して社会性を高めたことである。社会性動物の一員として、ヒトはもともと、群れ（集団）で食べる習性を持っていた。身体も小さく、身体能力に長けていないヒトには、そうするしか生きる道はなかった。みんなであって、みんなで食べる。もちろん、みんなであつたものの配分にはいろいろなルールがあつたことだろう。

調理が始まると、食はいっそう社会化した。f集団内での分業化を推し進めたということだろうか。g食材を獲ったり採ったりする役目、燃料を集める役目、調理する役目。それぞれに固有の技術があり、それは世代を越えて次世代に伝えられた。調理の基本は、注中尾佐助も指摘するように、加熱と、そして食材の保存にある。加熱のもっとも原始的なスタイルは直火で焼いた

り蒸し焼きにするという手法だろうが、これは、火を囲んでの食事というスタイルを定着させたことだろう。また、熱を加えることで食材を柔らかくし、殺菌、毒消しが可能となり、食材のレパートリーもぐんと広がった。穀類やイモ類が有効に利用できたのも、加熱によるデンプンのアルファ化ができたからである。デンプンは、種子に蓄えられたままの状態では硬く、また消化も悪いが、熱が加わることで分子の構造が変わって柔らかくなり、また消化もよくなる。この状態になることをアルファ化といい、加熱の意味合いのひとつとなっている。

食材の保存は、調理のプロセスを長くした。採ってきた（あるいは収穫した）食材を保存するためには、適切に処理し、発酵などの複雑なプロセスを間違ひなくこなし、さらに保存中にも適切な管理をすることが必要である。ぬかみその糠床をよくかきまぜたり、貯蔵庫の温度管理をするなどはまさにそれであった。もしこれに失敗すると食材は腐敗し、集団を構成する人びとの生命は危機にさらされる。食中毒はこの一例で、当時の食材の保存は集団全体の生命維持に直結していたのである。そして、長いプロセスは知の体系化につながり（だから経験がものをいった）、作業の分業を促し、調理という仕事を専門化させていったのだろう。

農業は、他者のため、それも見ず知らずの他者のために食材を生産する生業である。h それは社会的分業の結果でもあり、また同時に社会的分業を牽引する役割を果たした。自らの食料を自ら生産しない人びとが集まる都市では、やがて、調理を他者にゆだねる人びとも現れる。調理の外部化あるいは食の外部化のはじまりである。とくに、交易の担い手にとっては、旅先での自らの食を、安全に、また安定的に保障してくれるしくみが必要である。饗応、接待のおこり、食べる視点からいえば（i ）のおこり、である。

（佐藤洋一郎『食の人類史』に拠る。）

注 中尾佐助…… 大正五年八月十六日生、平成五年十一月二十日没。植物学者で、大阪府立大学名誉教授。「照葉樹林文化論」の提唱者として著名。

問一 傍線部aの「調理は、まさに「必要の母」であった」とはどういうことを述べたものか。次の①～⑤の中から最も適当な説明を一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は 21。

- ① 「必要は発明の母」を間違ひて利用し、「食材の範囲を大きく広げる」という「必要」に応じて、「調理」という「発明」が生まれたと言っている。
- ② 「必要は発明の母」を間違ひて利用し、「殺菌、消毒」という「必要」に応じて、「調理」という「発明」が生まれたと言っている。
- ③ 最近話題の「発明は必要の母」を使い、「調理」が「発明」されたのに応じて、「殺菌、消毒」という「必要」が生まれたと言っている。
- ④ 「生存に欠かせない栄養素の摂取」という「必要」の母体となって支えたのが、「調理」であったと言っている。
- ⑤ 「乳幼児の健康状態の改善と死亡率の低下」という「必要」の母体となったのが、「調理」であったと言っている。

問二 文中の空欄bに入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は 22。

- ① 禁忌 ② 奨励 ③ 偏頗 ④ 軽視 ⑤ 艱難

問三 傍線部cに「ジャガイモは、明らかに一六世紀以降のものである」とあるが、「明らかに」と言うからには、ある程度の知識のある者なら誰もが知っている事実に基づいていると考えられる。その事実とはどういうものであると推定できるか。次の①～⑤の中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は 23。

- ① ジャガイモのアルファ化に成功したのは一六世紀である。
- ② ジャガイモの寒冷地での生産が可能になったのは一六世紀である。
- ③ ジャガイモの地上栽培が広まったのは一六世紀である。
- ④ ジャガイモが原産地の南米から欧州に伝わったのは一六世紀である。
- ⑤ ジャガイモの芽の毒性が知れ渡ったのは一六世紀である。

問四 傍線部dの「ところで」から文章末までを一つの大きな段落と見て、内容に応じた小見出しを付けるとすると、どのように付ければ良いか。次の①～⑤の中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は24。

- ① 食を通じて社会性の獲得
- ② 集団内での分業化の推進
- ③ 農業の誕生
- ④ 食するという行為の社会化
- ⑤ 社会的分業の発達

問五 傍線部eに「食えるということがもたらしたものがもうひとつある。それが社会性の発達である」とあるが、ではこれ以前に取り挙げられているひとつとは何か。次の①～⑤の中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は25。

- ① 生存に欠かせない栄養素の摂取
- ② 調理の発明
- ③ 乳幼児の健康状態の改善と死亡率の低下
- ④ 定住化
- ⑤ 「糖質とタンパク質の同所性」

問六 傍線部fに「集団内での分業化を推し進めたということだろうか」とあるが、この表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は26。

- ① 他者の意見を自分なりに言い換えたので、疑問形になっている。
- ② 読者と共に種々の可能性を検討するため、疑問を提示した。
- ③ 前言に対して、はたしてそうだろうかと疑問を呈した。
- ④ 一つの仮説を示している。
- ⑤ 文末は婉曲表現で疑問を示しているのではない。

問七 傍線部gに「食材を獲^とったり採^とったりする」とあるが、筆者が「とる」を「獲」と「採」との二つの漢字を使って書いた意図はどういうものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は27。

- ① 「獲」は自然から食材を手に入れることを、「採」は栽培や牧畜で食材を手に入れることを示している。
- ② 「獲」は動物質の食材を手に入れることを、「採」は植物質の食材を手に入れることを示している。
- ③ 「獲」は狩猟によって食材を手に入れることを、「採」は採集によって食材を手に入れることを示している。
- ④ 「獲」は食材からタンパク質の栄養を取ることを、「採」は食材から糖質の栄養を取ることを示している。
- ⑤ 「獲」は主に男が猟具や漁具で取ることを、「採」は主に女が手で取ることを示している。

問八 傍線部hの「それ」を文脈に合うように言い換えたものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は28。

- ① 見ず知らずの他者
- ② 見ず知らずの他者のために食材を生産する生業
- ③ 見ず知らずの他者のために食材を生産すること
- ④ 見ず知らずの他者のために食材を生産する農業以外の生業
- ⑤ 見ず知らずの他者のために食材を生産する生業としての農業

問九 文中の空欄iに入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は29。

- ① 補助食
- ② 非常食
- ③ 外食
- ④ 飲食
- ⑤ 捕食

教養問題 (現代文)

(五枚のうち1)

問題一

問一

次のa～eの意味を表す語として最も適当なものを、後の①～⑩の中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えよ。解答番号はa | 1、b | 2、c | 3、d | 4、e | 5。

- a 定まって変動しないこと。
- b すでに定まっていること。
- c あれこれ考えて定めること。
- d 法令の条文として定めること。また法令の個々の条文。
- e 行政官庁が、法令の定める所により、調査の上、ある資格を与えること。

- ① 公定 ② 指定 ③ 既定 ④ 規定 ⑤ 特定
- ⑥ 認定 ⑦ 策定 ⑧ 想定 ⑨ 選定 ⑩ 確定

問二

次のa～eの傍線部の「レイ」の漢字として最も適当なものを、後の①～⑩の中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えよ。解答番号はa | 6、b | 7、c | 8、d | 9、e | 10。

- a 大庄屋のレイ嬢だった曾祖母が女学校に通うために、一軒家が購入されたと言う。
- b ファンド精算時に余剰金が発生し、元金以上の返レイ金が支払われた。
- c 少しの円高でもレイ細企業には命取りになりかねない。
- d 多くの人間は、動物は人間にレイ属する存在だと考えてきた。
- e 平凡な日々の業務に精レイすることができると、重要な才能である。

- ① 令 ② 冷 ③ 鈴 ④ 零 ⑤ 齡
- ⑥ 例 ⑦ 戻 ⑧ 励 ⑨ 隸 ⑩ 麗

問三

次のa～eの空欄には慣用句を構成する語が入る。それぞれ最も適当なものを、後の①～⑩の中から一つずつ選び、その記号を答えよ。解答番号はa | 11、b | 12、c | 13、d | 14、e | 15。

- a 上杉家に従いながら、こつそり新興の織田家とも（ ）を通じていた。
- b 関係者からは（ ）で押したように同じ説明が返ってきた。
- c サミット期間中は会場周辺に（ ）も漏らさぬ警備体制が取られた。
- d 他社はどこも準備期間が短く、一年かけて用意してきた我が社と比べれば、（ ）が知っている。
- e 知ったかぶりをして利いた（ ）なことを言うものではない。

- ① 水 ② 息 ③ 風 ④ 板 ⑤ 鍵かぎ
- ⑥ 判 ⑦ 葉 ⑧ 塵ちり ⑨ 高 ⑩ 誼よしみ

問四 次のa～eの空欄に入る最も適当な動詞を、後の①～⑩の中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えよ。解答番号は

a i 16、 b i 17、 c i 18、 d i 19、 e i 20。

- a 親類中を（ ）て、やつとその時の写真を探し出した。
b あることないこと好きなように（ ）ていいが、二度と私の前に顔を出すな。
c いかにもそれらしい雰囲気の方が無遠慮に近所を（ ）ていた。
d 京都風の（ ）た言い方をしていたら、東京人の彼女には何も伝わらない。
e どう転んでも損をしないように（ ）ているのが、商売人というものだ。

- ① かぎまわつ ② かけずりまわつ ③ たちまわつ ④ でまわつ ⑤ とびまわつ
⑥ ねりまわつ ⑦ のたうちまわつ ⑧ ふれまわつ ⑨ もちまわつ ⑩ もってまわつ

問題二 次の文章を読み後ろの設問に答えよ。

では、子どもは初めて聞くことばの範囲をどのように推論しているのだろうか。結論を先に言うと、一歳半ばを過ぎたころには、子どもは「思い込み」を持って、ことばの指す対象と範囲をすぐに決めてしまい、あれこれ迷わないのである。

例えば、お母さんが青い陶器のコップを指差して、「コップよ」と言うのを聞いたとしよう。すると子どもは、色が違っても、素材が違っても、大きさが違っても、同じような形のモノなら「コップ」ということばを使う。^a形が違う青いモノや、陶器製のモノ（青いミニカーや陶器のお皿）には「コップ」は使えないと考える。つまり、子どもは自分の中に、「形ルール」ともいうべき、（自分が経験した）ことばと特定のモノの結びつきを一般化するためのルールを持っている。

（中略）

では、形ルールはどのように習得されるのだろうか。子どもは最初から形ルールを持っているわけではない。^bことばを話し始めてからの最初の何カ月かは、子どもはおもしろい間違いをする。例えば、外に雪が積もっているのを見ながら「雪だよ」と教えられた子どもが、床におちたタオルやこぼれたミルクも「雪」と言ったりする。地面にある白いものはみな「雪」だと思ふようだ。あるいは、「おつきさま」ということばを覚えた子どもが、グレープフルーツやレモンの輪切り、丸い掛け時計、クロワッサン、光があたってきらきらする葉っぱも「おつきさま」と呼ぶようなこともある。

つまり、最初のうちは、子どもはあることばを最初に結び付けられたモノと「似ているモノ」全般——形だったり、色だったり、手触りだったり——に手当たり次第、そのことばを使うというようなことをする。この時期に子どもは、覚えたばかりの一つひとつの単語がどのような基準の「似ているモノ」に使えるのか、同じことばで呼ばれるモノたちはどのような特徴を共有していて、どういう特徴は違っているのかを探っている。それは、新しいことばを聞いたときに、そのことばを他の状況で使っていくための手がかりとするためである。形ルールは、その結果、子どもが自分で発見したものである。

ちなみに、形ルールは「スキーマ」である。ことばを学習する経験からことばとはこういう決まりで成り立っている、いま聞いたことばは、形を手がかりに他のモノにも使えるという、ことばの学習についてのスキーマを子どもはつくったのである。新しいことばが使える範囲を決めるためのこのような手がかりを発見し、スキーマをつくると、すぐにそれを新しいことばを覚えるために使う。形が似ているモノを見るや、すぐにその形ルールを使ってことばの意味の範囲を推論し、それを記憶する。そして、さらに新しいことばを覚えていく。実験からわかったのは、子どもが知らないことばの意味を自分で考えて覚えていき、語彙を成長させていくときの、そのような構図である。実際、子どもは形ルールを使って、新しいことばを平均すると一日一〇語くらいのペースでどんどん覚え、語彙を爆発的に成長させていくのである。

子どもは耳にする言語をただ「聞き流す」のではなく、つぶさに分析して、語彙に潜むパターンを発見し、ことばの学習についてのスキーマをつくる。スキーマによって学習は加速する。言い換えれば、語彙の学習で、もつとも大事なことは、一つひとつの単語の意味を覚えることに留まらず、新しい単語の意味をすばやく推測し、語彙を増やしていくための^c「学び方の学び」を学習することなのだ。

ことばの意味を学ぶということは、一つひとつの単語が指す対象の一つを知るだけでは不十分である。ある単語をきちんと使うためには、その単語が指し示す意味の範囲を知らなければならないからである。しかし、単語の意味の指し示す範囲は、一つの単語それ自体では決まらず、それぞれの単語の境界はその領域に属する他の単語との関係によって決まる。

例えば「アオ」という色の名前の範囲は、「アオ」と隣り合う色である「ムラサキ」や「ミズイロ」「ミドリ」との境界で決まる。日本語の「着る」という動詞の意味を理解し、慣習に則して使うためには、「着る」「履く」「かぶる」「つける」など

の違いがわからなければならないはずである。

つまり、語彙は膨大な数の単語からなるシステムなのである。システムとしての語彙を身につけるためには、単語単体の意味を学ぶだけでは不十分である。単語同士の関係を学び、システムをつくっていく必要がある。その中で、似ている単語同士がどう違っていて、その二つの単語の境界がどこに引けるかを知ることがとくに大事である。子どもはどのように単語同士の関係を学び、システムを構築しているのだろうか。

大人でも日常生活で自分の知らない新しい語に触れる機会がしばしばある。例えば、目の前にネコがいるときに、あなたの友人が「あ、カヒグがいるよ」と言ったとしよう。あなたはいぶかしく思い、「目の前にいるのは自分の知る限り、どう見てもネコだ。なのに、なぜ友人は「カヒグ」なんて呼ぶのだろうか？」と考えるだろう。そして「このネコは飼い主に「カヒグ」という名前を付けられたネコなのだろうか？」とか、「ネコの中でも「カヒグ」という種のネコなのだろうか？」、あるいは「まさか自分の知らない新種の動物なのだろうか？」^d などのように考えるのではないか。

つまり、あなたは自分が知っている「ネコ」という概念と対比しながら、新しい「カヒグ」という語の意味を考えるだろう。これは大人が、ことばについての大事な性質、つまり、^e「一つの単語は別の単語と区別される意味を持つ」ということを知っているからだ。

ことば同士の関係にはどのようなものがあるか？ ^fまず「対比の関係」がある。「ネコ」と「ウサギ」、あるいは「リンゴ」と「バナナ」は、互に対比的な関係にある。「ネコ」のカテゴリリーに入るモノは「ウサギ」ではないし、「リンゴ」と呼ばれるモノは「バナナ」ではありえない。

それに対して「動物」や「ペット」は、「ネコ」も「ウサギ」も「イヌ」も含む、より包括的なカテゴリリーである。それに対して「アメリカンショートヘア」や「チワワ」はそれぞれ「ネコ」「イヌ」のカテゴリリーに含まれる特定の種類のネコ、イヌを指す。

子どもが今まで聞いたことがない、新しいことばを聞いたとき、そのことばと結び付けられる対象はいつも、いままでに見たことがない、未知のモノだとは限らない。「バナナ」を指しているのに「果物」と言われることもある。目の前にあるのは「リンゴ」なのに「フジ」ということばを聞くこともある。つまり、子どもは「バナナ」と「果物」がどのような関係なのか「リンゴ」と「フジ」がどのような関係にあるのかも見極めなければならないのである。

子どもは ^gここでもあれこれ迷わない。二歳くらいになると子どもは、さきほど述べたように二つの違うことばがまったく同じ意味を持つことはないという、語彙の一般的な性質に気づくようになる。これも語彙についてのスキーマである。

知らないモノに対して知らない単語を聞くと、子どもたちはそれを普通名詞だと考えて、それと形が似た他のモノに対してもそのことばを使う。しかし、例えば「ペンギン」のように、すでに知っている動物をターゲットにして、「これはヘクというのよ」と ^h知らない名前を教えられると、子どもは、「ヘク」とはターゲットの「ペンギン」に与えられた特定の名前、すなわち固有名詞だと考える。つまり、二歳くらいの子どものは、「ヘク」は「ペンギン」とは違う意味のことばだと考えるのである。

それだけでなく子どもは、動物は固有の名前を持つが、人工物は固有の名前を持たないと知っている。ターゲットを、すでに名前を知っている人工物、例えば「コップ」に替えて、「これはヘクというのよ」と教えてみる。すると今度は、「ヘク」を固有名詞だとは考えずに、「紙コップ」のように、一般的な「コップ」よりも狭い範囲の意味のことばとして「ヘク」を解釈する。二歳くらいになるとすでに子どもは、「ペンギン」や「ネコ」のような動物には「ポチ」や「タロー」のような固有名詞の名前がつくことを知っている一方で、「コップ」や「ボール」のような人工物には「ポチ」や「タロー」といった固有名詞はつかないと知っていて、その知識をはじめて聞く単語の意味を推測する時に使うのである。

（今井むつみ『学びとは何か』に拠る。出題の都合で傍点と小見出しは省略した。）

問一 傍線部 a の一文は、「（青いミニカーや陶器のお皿）」という注記を入れることで誤解のないようにしているが、注記を入れずに同趣旨のことを言い表すこともできる。その一文として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は 21。

- ① 色や素材が同じでも、形が違うモノには「コップ」は使わない。
- ② 青いモノや陶器製のモノでなければ、「コップ」は使えないと考える。
- ③ 色や素材が違っていたら、形が同じモノでも「コップ」ということばは使わない。
- ④ 色や素材、形や大きさが同じでも、手当たり次第には「コップ」ということばは使えないと考える。
- ⑤ 色が違ってても、素材が違ってても、大きさが違ってても、形の違うモノには「コップ」ということばを使わない。

問二 傍線部bに「ことばを話し始めてからの最初の何カ月かは、子どもはおもしろい間違いをする」とあるが、子どもはなぜこういう間違いをすると筆者は考えているか。次の①～⑤の中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は 22。

- ① 新しいことばの指す対象と範囲をすぐに決めてしまうから
- ② 新しいことばの意味を自分勝手に決めているから
- ③ 新しいことばの使い方を理解していないから
- ④ 語彙がシステムであることをまだ理解していないから
- ⑤ 一つの単語は別の単語と区別される意味を持つ、ということはまだ知らないから

問三 傍線部cの「学び方の学び」を学習すること」を分かり易く言い換えたものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は 23。

- ① 学習機会の確保
- ② 学習手段の獲得
- ③ 学習方法の習得
- ④ 学習段階の確認
- ⑤ 学習順序の把握

問四 傍線部dの「など」の前にはいくつかの考え方の例が示されているが、ここにもう一つ、筆者は取り上げていないが、日常的にはごく自然に思い浮かぶ「ことば同士の関係」にまつわる、例を加えるとしたら、次の内どれを加えることができるか。次の①～⑤の中から最も不適当なものを一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は 24。

- ① 「どこか外国の言葉でネコのことを「カヒグ」と言うのだろうか」
- ② 「友人の地元の方言ではネコのことを「カヒグ」と言うのだろうか」
- ③ 「「カヒグ」というのはネコのことを指す最近の若者言葉だろうか」
- ④ 「「カヒグ」というのは何かのシャレであろうか」
- ⑤ 「「カヒグ」というのはネコの隠語だろうか」

問五 傍線部eに「一つの単語は別の単語と区別される意味を持つ」とあるが、「なす」と「なすび」や「かぶ」と「かぶら」のような関係になる単語はどう考えればよいか。次の①～⑤の中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は 25。

- ① 例外的な存在で全く意味の区別はない。
- ② 語呂の違いだけで意味の区別はない。
- ③ 方言と共通語の関係で区別される意味を持つ。
- ④ 「リンゴ」と「フジ」と同様の関係で区別される意味を持つ。
- ⑤ 微妙な語感の違いで区別される意味を持つ。

問六 傍線部fに「まず「対比の関係」がある」とあるが、この次に筆者が挙げているのはどういう関係か。次の①～⑤の中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は 26。

- ① 無関係
- ② 類似の関係
- ③ 補完の関係
- ④ 対の関係
- ⑤ 包含の関係

問七 傍線部gに「ここでも」とあるが、ではもうひとつはどこか。次の①～⑤の中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は 27。

- ① 初めて聞くことばの指す対象と範囲の推論
- ② 形ルールの習得
- ③ スキーマの作成
- ④ 語彙システムの構築
- ⑤ 新しいことばを聞いたとき

問八 傍線部hに「知らない名前を教えられると、子どもは、「ヘク」とはターゲットの「ペンギン」に与えられた特定の名前、すなわち固有名詞だと考える」とあるが、筆者はなぜ「名前を固有名詞だと考える」という説明にもならない説明をあえてしたのだと考えられるか。次の①～⑤の中からその理由の説明として最も適当なものを一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は 28。

- ① 子どもは他の可能性を考えず、すぐ固有名詞だと考えるということを明確に言うためだと考えられる。
- ② 大人の場合の説明があるため、すぐ固有名詞では説得力に欠けるのを、強引に推し進めようとしたためだと考えられる。
- ③ 二つの「名前」は違う意味で使われており、それを十分読者に考えさせようとしているためだと考えられる。
- ④ 「知らない単語」という表現を続けずに変化を持たせようとした結果だと考えられる。
- ⑤ 「知らない単語」と言うべきで、単に不注意であつたためと考えられる。

問九 文中の数箇所に使われている「スキーマ」という単語の本文における意味を、子どもに倣って推定するとどうなるか。次の①～⑤の中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えよ。解答番号は 29。

- ① この世界の種々のものに潜む規則性に関する明確な知識
- ② 極めて初歩的だが極めて効率の高い方法論に関する知識
- ③ 経験に基づいて何かについて大まかに一般化された知識
- ④ 体験的に自然と身に付いているその人なりの教訓的知識
- ⑤ 語彙システムを支えているルールに関する体系的な知識